
「鈴の音アリス」

水上羚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「鈴の音アリス」

【NZコード】

N1917Q

【作者名】

水上羚

【あらすじ】

その時々にあわせて仮面をかぶるようになり性格を変えて演じる主人公、高倉千百合。たかくらちひり無愛想で不器用のフリをし続ける人間とは何かを知りたいが故に人間観察をし、日記までつける変人の一般人を自称する男子高校生で主人公の幼馴染、高木力ナ工。

主人公の千百合は夢うつつのなかで過去と向き合い、準主人公の力ナ工は自分なりに千百合の過去を探り、真実へと至る。そのさきには・・・

忘れてしまった大事なこと。思い出したい大切なことはありません

これは忘れてしまったことにたどりついて物語。
か？

へぬへぬ。まわづはるじへじへ? (前書き)

最後が謎過たり、ストーリーがおかしいかもしだせんがあたたかいめで見守つてください。

へぬへぬ。まわってどうへいく？

退屈で単調な日々の繰り返し。ある種の呪縛から開放されたように生徒が教室からでていく。

窓際の列の最後尾の席に座つて、

ふわふわしたショートヘアの黒髪もてあそを弄びながら

とある男子生徒がノートになにかを書き込んでいる。

男子生徒が書き込んでいるオレンジのノートの表紙には

「人間観察ノート28冊目」と書かれていた。

ノートオレンジ色のノートに何か書き飲んでいた男子生徒が顔を上げて

いつのまにか正面に立っていた女子生徒をキャラメル色の瞳で見た。

「また、いつものアレを書いているの？カナちゃん。本当に人間つて何だらうね」

男子生徒の正面には癖の強いロングヘアの、

ぱっちりした大きなダークブラウンの瞳が印象的な女子生徒が好奇心に目を輝かせて

キャラメル色の瞳を見ていた。

サブタイトルに意味はありません。

「そのカナちゃんはいいかげんにしろ、千百合^{ちゆつ}。恥ずかしいだろうが。

オレが人間とは何かを知りたいから書いているノートを見るな。プライバシーの侵害だ」

「だれもいないからいいのに。あと、だれもいないときはちいって呼んでとおねがいしたのに」

「それを言っていたのは小さい頃の話だろ？ もう子供じゃない。いい加減にしろ」

あからさまに不機嫌そうにする千百合と呼ばれた彼女を無視して、カナちゃんと呼ばれた彼は乱暴に表紙にオレンジ色の「人間觀察ノート28冊目」

と油性ペンで殴り書きされたノートを閉じた。そのままやや早足で出て行つた。

「・・・いいじゃん、たまには。いつこう田もあるよ。ぜんぶダメなのは、

思い出してもよくないことを思い出した私なのかな？ やっぱり・・・。忘れたままでいいのかな？ 人によって口調とかも変えちゃう私が悪

いのかな？」

からっぽで一人きりでがらんとしてしまったひとのぬくもりのない
教室を

わざとゆっくりと時間をかけてでていく。感傷的に鳴ったかのよう
に、

ぬくもりに浸つていいかのように。重い足取りで彼女は学校を出
た。

学校を出た瞬間足取りが軽くなり、人通りの少ないわき道へと入つ
ていく。

おもかねおいしいよ

力ナエは帰り道にふと昼休み、友達に千百合が昨日千百自身の父親について

話していたことを思い出した。話し方がいつも丁寧な口調とは違うやや幼い口調

と仕草だったので僅かに違和感を覚えていた。千百合には話したりする人によって態度

や口調や細かいところまでも変わり、

まるで何かを演じているかのようになる癖があるのを思い出した。

千百合には一人の父親がいる。一人は血のつながった彼女が幼い頃に事故死した実の父親。

もう一人は数年前に彼女の母親の再婚相手。

関係は良好で相手の連れ子とも仲がいいと本人から聞いた。

じつは、彼女の実の父親の死に方がどうにも不自然。

当時住んでいた高層マンションのベランダからの転落死。

当時、現場には千百合と千百合の父だけしかおりず、

千百合は遊び疲れて血室で寝ていたとされる。

彼女自身は今となつてはほんやりとしか覚えていないと寂しそうに笑つた。

時刻は休日の昼下がり、不審人物の目撃情報も無かつたことから迷宮入りとなつた

「××県 市高層マンション転落死事件」。

気になつたのでまずは近所の市立図書館に足を運んだ。

ねむいですの

学校近くの大きな市立図書館の内のパソコンを利用し、検索条件を絞り込み検索すると今までカナエが知らなかつた情報を得られた。

当時彼女は、一度うつたねをしていて、ぼんやりとした視界の中、眠い目をこすりつつ瞬きをした次の瞬間に父親が取り込み中の洗濯物とともにベランダから消えたと証言していたと

パソコン内のデータベースの記事にあった。その後、彼女は疲れて本格的に寝入つてしまつたので思い出すのに時間がかかったとも記載されていた。

だが、警察当局は幼い為重要度は低いと判断したようで詳しいことは記載されておらず、

わからなかつた。ほかの数社の新聞記事も似たような記事ばかりだつたため、

細かい情報を得ることができなかつた。さらに詳しいことが知りたいので、

隣に住んでいた自分の家族にも聞いてみよう。

記事の一部の書き出しをノートにまとめてから市立図書館からでた。

ねむくでしかたない

自然と早足から、駆け足へと変わつて行く自分の足と心情に驚きを隠せないまま、

カナエは思せき切つて建てられてからかなり年数のたつた血脉へと
帰つた

かなりタイミングよく母がスーパーのパートタイムから帰宅していくので、

父が仕事から帰つてくるまで緑茶を飲みながら事件前後の話に耳を傾けた。

そのとき、ひょうひょう小雨がぽつり、ぽつりと降り出し、カナエの母
がぽつり、

ぽつりと當時のあの事件の事を語りだした。

音も立てずにカナエはノートを開き書きとめ始めた。

小雨はだんだんと雨脚を強くしてこき、いつのまにやら本降りへと
変わつていった。

寒いですね。

母が語りだしてからすぐに父親が珍しく、

残業もせずにまっすぐ帰宅したことにカナエは

驚きを隠せないままダイニングキッチンのテーブルで向かい合って、

少しずつあの事件の事を聞いたと話しかけた。

カナエの両親は昔の記憶を思い出しながら、ぽつり、ぽつりと語りだす。

些細なことも聞きもりすまこと、熱心に手にしていたスカイブルーのノートに記入していく。

カナエの両親曰く、事件直後に千五百円の証言に不自然な点があった。

その証言とは、事件が起きてしまったとして千五百円のお父さんを

びっくりさせようとしたらお父さんが消えたといった事が一度だけあつた

父親が当時のことを振り返った。

「ただ、両親の話と新聞記事との相違点に

一生懸命ノートに書き込んでいたカナエだけが気がつく。

まるで彼女のせいで彼女の父親が転落死したようじゃないかと考えた。

記入後すぐに弾かれる様にスカイブルーのノートと

黒のボールペンを握り締めて隣の彼女の家の扉をたたいた。いつの間にか雨は止んでいた。

寒くて震えます

千百合は急に田の前に現れた森に数秒呆然としていたが、
氣を取り直して肩からずり落ちたカバンをかけなおして、ゆっくり
と森を見る。

いつもの通学路ではなく、以前から氣になっていたわき道や小道を
夕暮れの中を

鼻歌混じりに進むといつの間にか見覚えのない森の前に立っていた。
森を見て好奇心に紅潮するほほ、弾む心、森にたどり着く前の軽や
かな足取りは消え、

口ずさむは懐かしい歌を歌つていたが、

その歌を歌つことも忘れて森に驚いてしばらくなは声も出せなかつた。

すべてを斜陽の赤が染め上げる。黒々とした繁茂した森の前で足が
止まる。

「わあ、大きい森。何があるのかな？」

風の音と風で木の葉がこすれあう音だけが響く。しばらくなは何も考
えずにその音だけを聞く。

ふと、森の向こうから鈴のリンとう音が聞こえた気がした。

振り返り、しばらく森を凝視する。

しばらくすると等間隔でかすかに鈴のなる音がするのが聞こえた。

教科書などが詰まった重いカバンを森の端の大木の根元に置いて、普段となんら変わりない歩調で森の中に入った。なつかしい鈴の音に誘われて。

眠氣でまぶたが重い

まづくつと森を歩いてしばらぐすると視界が一変した。

日の光が差さない薄暗い森からから穏やかで暖かな春の日差しが降り注ぐ明るい木がまばらな林に変わっていた。

またゆづくりと林を調べながら歩くと大勢の談笑の声がした。

林の奥を更に進むと急に開けた場所に行き当たった。

千百合ちゆつの数メートル先には長方形のテーブルに

薄いレース編みの白いテーブルクロスがかけられ、

臙脂色のビロード張りの黒檀の椅子が置かれ、お茶会が開かれていた。

お茶会の席に座っていたのはスースを着込んだ優しげな雰囲気の白いウサギ、

大きい黒のシルクハットをかぶったサファイアブルーの瞳が印象的な幼さのこる少年、

黒猫がケラケラと笑い、のんきな居眠り中の明るい茶色のネズミ、

ティアラをつけた薔薇の刺繡が美しい淡い桃色のドレスを着た女の

子、

そして中央にはシンプルな淡いオレンジのワンピースの幼い自分と黒いリボンの

カチューシャをつけた赤いワンピースの人形のように整った幼い自分と同じくじらこの

年頃の女の子。お茶会の席に座っている小さく頃の自分に動搖して立ち止まる。

まるで自分と赤いワンピースの女の子がアリスのかのように振舞つ

田前の幻想を立ち止まって見つめる。お茶会を見ていて、

立ち止まると大量の鈴が頭の中で鳴り響く。

その鈴の音に耐えられなくて振り返りながら奥へ奥へと走る。

鈴の音を振り払おうと更に進む。

千百合の頭の中で鳴り響く鈴の音せざりまでも千百合を追いかける。

追い詰めるよつて、追い詰めるよつて元気だも。

かわいいお菓子は好きですか？

また千百合の視界が一変し、

千百合の田の前には安っぽくて白いリノリウムの壁と
チョコレート色の木材が規則的に並んだフローリングのリビングル
ームが現れた。

オーク材の丸い大きなテーブル、二つのオーク材の大用のイスと
小さな子供用のイス、

古びたパッチワークの模様のよつたカーペットの上にはクレヨンと
スケッチブックと

赤いワンピースの女の子の人形、帽子をかぶった男の子の人形、
白いウサギのぬいぐるみ、茶色い熊なのかよくわからないぬいぐる
み、

淡い桃色のドレスを着た女の子の人形、黒猫のぬいぐるみが散乱し
ていた。

「ここは、小さい頃住んでいたマンションだ」

ふと小さい声がもれた。

スケッチブックに視線を落とすとカーペットに散乱していた人形と

ぬいぐるみを模写したである。絵とオレンジ色のワンピースの女の子が描かれていて、

大人の文字で千百合、アリス、シロウサギ、ネムリネズミ、

チエシャ猫、女王と添え書きがあった。

燐々と柔らかく暖かい日光が降り注ぐ春のベランダとは反対方向にある、

樅の木の扉から小さな足音と鈴の転がるよくなわいらしい笑い声がするので、

その方向をむくと満面の笑みの淡いオレンジのワンピースの幼い自分が

リビングの向こうのベランダにいる若い男性にお父さんと両をかけながら走りよひよひである。

ジャンプして抱きつこうすると千百合の父親が驚き、

その弾みでベランダでの向こうへと落ちていった。

幼い自分は何が起きたか理解できずにしばりべ部屋中を探し回つてから

後で戻つてくると思い込み、リビングに戻りひとしきり遊んでは寝入つてしまつた。

ねむすぎてつらいです

数分は理解できなくて床に座り込む。

そしてじつくり考え込む。そして、立ち上がって、先ほどの幻を見てすべてを理解した。

「あれはもしかして、私の本当のお父さんなの？」

じゃあ、あれはもしかして……と思い出したよ。全部、何もかも！」

理解してすぐに眩しい光に包まれて思わず目を閉じてしまった。

気がつくといつの中にか森の前に戻っていた千百合はわれに返ると家路へと急いだ。

同時に、カナエは事件を自分なりにまとめ、となりの幼馴染の千百合の家を訪ねた。

千百合の母親に部屋を通されると千百合の部屋には

千百合がベッドの上でクッションを抱えて呆然とした表情で寝転がっていた。

カナエは足音も立てずに黙つてベッドのすぐそばに座り込み、千百合に声をかけた。

「千百合。起きる」

すぐに、気がついたのか跳ね起きる。

「うわっ、カナちゃんいたの？」

あわてて寝癖の着いた髪の毛を整える千百合を呆れ顔で見つめてから持参してきたカバンの中からスカイブルーのノートを取り出し、ガラスのテーブルの上に置いて開き、どうじてこうなったのかを聞いた。

「どうした？ おまえらじへない」

「うーんとね。お父さんのこと思い出したの、今日の帰り道に」

「そうか」

カナエは短い無愛想な返事ばかりを連ねて返す。

カナエの纖細な文字で綴られた事件概要や

関係者証言にカナエ自身の家族の言葉をまとめたノートを

千百合に見せて自分なりの答えを話す。

千百合も、思い出した断片的なことを忘れないようにじっとりと書き留める。

こうして、二人だけが辿りついた真相を書きとめて誰にも触れられない場所へと隠し、

真相は闇の中へと消えていった。

帰宅後、カナエは世の中には知らないほうがいいこともあるのだとつぶやいて

田舎の田記帳にしているライムグリーンのノートを閉じた。

おわらひ・・・・・

これで、「鈴の音アリス」はおしまいとなります。

いかがでしたでしょうか？おたのしみいただけましたか？

授業中に思い浮かんだワントーンがここまで物語になりました。

今思えばなぜかスマートに進んだ執筆に内心戸惑つておりました。

私の場合ちまちま書いては投稿が定番だったからです。

書いているものがファンタジーログロなので

現代ものには不慣れで試作品めいた小説になりました。

とりあえず、これにて「鈴の音アリス」は終了となります。

ありがとうございました。

2011 3 4 水上 紗衣みながみれい

風の強い日にて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1917q/>

「鈴の音アリス」

2011年3月4日13時52分発行